

友達とセックスしたら、元に戻るんだろうか。

——一週間前のことが、頭から離れない。

きっかけは高額バイトだった。『心理学研究の被験者募集 謝礼5万円』。大和に誘われて軽い気持ちで応募したら、中身は男女の性的反応を調べる実験で、大和とは男女の関係を持ってしまった。

——友達なのに。

それから一週間。大和とは普通に会っている。いつも通り、ただの友達として。

——違う。友達のふりを、している。

大和と目が合うたびに、白い実験室がフラッシュバックする。脚を開かされたこと。舌でおまんこを舐め回されたこと。物置に連れ込まれて、後ろから犯されたこと。

全部、鮮明に覚えてる。忘れたくても忘れられない。

（……私、大和のこと好きなのかな）

あのバイトの前は、考えたこともなかった。でも今は、大和の名前がスマホに表示されるだけで心臓がうるさくなる。

（……最悪）

だって、大和はきつと私とは友達のままでもいいのだから。

金曜の夜、サークルの飲み会があった。

いつもの居酒屋。いつものメンバー。大和は斜め向かいに座っていた。いつも通り笑って、いつも通りふざけて。

飲み会は楽しかった。二次会のカラオケで、サークルの高橋先輩が隣に座ってきた。

「ここ空いてる？」

「あ、はい。どうぞ」

高橋先輩は三年生で、面倒見がよくて、男女問わず人気がある。

「お前、最近なんか綺麗になったよな」

「え、そうですか？」

「なんか色気出てきた」

「何言ってるんですか、先輩！」

（……もしそれが事実なら、きっと大和のせいよね）

そう考えると、なんだか悔しかった。

「マジマジ」

そう言って先輩が笑いながら、肩にぽんと手を置いた。そのまま合宿の話とか、サークルの話とか。先輩の手が肩から背中に滑り落ちる。

（……距離近いな。まあ先輩も酔ってるし、こんなもんよね）

それでも飲み会は楽しかった。先輩の話は面白いし、お酒も進む。

ふと、斜め向かいを見た。大和と目が合った。——普通に笑ってた。目が合ったら「何？」って口の形だけで言ってきた。いつもの大和だ。

(……気のせいかな)

一瞬だけ、大和の表情が固かった気がした。でもすぐ笑ったから、きっと気のせいだ。

カラオケが終わって、解散。気づけば終電ギリギリで、間に合わなかった。

「うち、歩いて十分だけど。泊まってけよ」

大和がいつもの調子で言った。前の私なら何も気にせず、「行く行く」と返していただろう。私と大和に何か起こるわけではないと、そう信じていたから。でも、今は——

「ソファ貸すから」

「……うん。ありがとう」

並んで歩く。大和がいつもよりちょっと静かな気がしたけど、飲み疲れかなと思った。

「大和、もしかして疲れてる？」

「ん？別に」

「そっか」

それだけ。特に変わったことはなかった。——と、思ってた。

大和の部屋に着いた。

なんか、片付いてる。テーブルが綺麗だし、ゴミ箱も空だし。大和の部屋がこんなに整ってるの初めて見た。

（……偶然かな。大掃除でもしたのかな）

「シャワー先使っていいぞ」

「ありがとう」

バスルームに入って、シャワーを浴びる。問題は下着だった。夏場の飲み会で汗をかいて、気持ち悪い。洗面台で洗って干してしまった。

大和に借りたTシャツを被る。サイズが全然違う。膝上くらいまである。結局下着は履いていない。

（大丈夫。Tシャツ大きいから見えないよね……）

バスルームから出た。

大和がベッドの端に座っていた。ビールの缶を持ってる。一口も飲んでないみたいだった。

「あ、上がっ——」

大和の目がこっちを向いた。Tシャツの裾から素肌の太ももへ、視線

が落ちて――

大和が目を閉じた。深呼吸――長い呼吸。ビールをテーブルに置いた。

「……下、履いてないだろ」

「なっ……な、なんで分かるの」

「分かるだろ」

「ご、ごめ……下着洗っちゃって、乾くまで――」

「男の部屋でノーパンってさ……自覚ある？」

声が低い。いつもの軽い調子が、どこにもない。

大和が立ち上がった。近づいてくる。

「ちよ、大和――」

「一週間我慢してたんだよ」

「え……」

「お前があの日みたいな声出すの、ずっと聞きたかった。毎晩お前のこ

と考えて頭おかしくなりそうだった」

「大和……？」

いつもの大和じゃない。目が据わってる。声が震えてる。何かを堪えてるみたいな顔。

「あとさつき——高橋さんがお前の肩に触った時……背中撫でた時……お前が楽しそうに笑ってた時」

壁際まで追い詰められた。背中に冷たい壁。

「ムカつきすぎてどうかしそうだった。気安く触るアイツの手折りたいて……お前に触んたって」

「……っ」

心臓が跳ねた。大和の目が、あの日の物置と同じ——いや、もっと暗い。

（……なんで……？ 大和怒ってる……？）

「友達相手にこんなこと思ってる自分がヤバイのは分かってる。でも止まんない。お前抱いてから……俺……おかしくなっちゃった……」

（大和が……こんな顔するの、初めて見た）

怖い。——のに、お腹の奥がじんわり熱くなる。大和の壊れかけた目を見て、身体が反応してる。

「大和、落ち着い——」

「無理」

大きな手でぐいっと頭を引き寄せられ、唇を塞がれた。

荒くて深いキス。ビールの味がする。舌が唇をこじ開けて、口の中をかき回してくる。あの日の物置でもキスはしなかった。初めてのキスが、こんなに必死で、こんなに乱暴で。

ヌチュッ♡レロッ♡

「ん……っ♡ふ……っ♡」

（大和のキス……怒ってるみたい……）

唇が離れた。糸を引いてる。大和の息が荒い。

「ベッドに座って」

肩を押されて、ベッドの端に腰を落とした。大和が目の前に膝をついた。

「Tシャツ……上げて」

「……っ」

「自分で。お前のおまんこ、自分から俺に見せて」

「そ、そんな……」

「あのバイトの時は指示されたから見せたんだろ。今は違う。お前の意思で見せてよ」

（自分から見せるって……あの時は実験だったから仕方なくて……でも今は……）

そう思うのに、いつもと違う大和の声に抗えない。震える手で、Tシヤツの裾を持ち上げた。太ももが露わになる。その奥の、何もつけていないおまんこが、大和の目の前に晒された。

「……見ないで……」

「もう濡れてんじやん」

「っ……♡」

「キスただけでこんなにマン汁出して。一週間お前も我慢してたんじやねえの」

「が、我慢なんか――」

「嘘つけ。入り口ヒクヒクしてる。舐めてほしくてたままないって顔してる」

（バレてる……♡一週間ずっと大和の舌思い出してた……あの時気持ちよかったの、どうしても忘れられなくて……♡）

大和の顔が近づいてくる。吐息がかかる。鼻先がほとんど触れそうな距離。

「高橋さんがお前に触ってる間、ずっとお前にこうするの想像して我慢してた」

「え……」

「あいつの手がお前の肩に乗った瞬間、お前をここに連れてきて、脚開かせて、おまんこをベロベロに舐め回してやるって。ここは俺のだって。——あいつに聞こえるくらい声出させてやりてえって」

「や、大和……そ、そんな……」

「おかしいだろ。でも、もう隠さない……本当のことだから」

舌が伸びてきた。——でもまだ触れない。秘部の手前、太ももの内側を、ゆっくり舐め上げる。

チロッ♡チロッ♡

「ひっ……♡」

「まだ触ってないのにこの反応？」

「だ、だって……♡」

舌が内腿を這っていく。右を舐めて、左を舐めて。おまんこのすぐ隣まで来て——そこで止まる。わざと一番欲しいところだけ避けてる。

チロチロ♡チュルチュル♡

「やっ……♡そこ、じゃなくて……♡」

「そこじゃなくて？どこがいいの？」

「……っ♡」

「ちゃんと言えって。あの実験の時みたいに」

「……ん……お願い……舐めて……♡」

「もっとちゃんと」

チロチロチロチロ♡♡

「……んん♡わ、私の……おまんこ舐めてください……♡♡」

「——ふっ。素直なのかい」

ピチャッ♡♡

「ひっ……♡♡」

舌先が、やっと花卉に触れた。——かと思った瞬間、丁寧さが消えた。

レロレロッ♡♡デュルルッ♡♡

「ひあっ♡♡やっ♡♡いきなり——ふあっ♡♡」

あの実験の時と全然違う。あの時は指示に従って、丁寧に、様子を見ながらだった。今は違う。飢えた獣がそのまま食らいついてきてるみたい。花卉を舌でベロベロ舐め回して、蜜を啜り取っていく。

チュパッ♡♡レロレロッ♡♡

デュルルッ♡♡デュルルッ♡♡

「あっ♡♡やっ♡♡あの時と、ぜんぜんちが——んあっ♡♡」

「あの時は実験だから手加減したけど、もうしない」

舌が花卉の間を割って、奥に潜り込もうとする。クリトリスの周りをぐるぐると舐め回す。でもまだ一番欲しいところには直接触れてくれない。すぐ隣を通って、また外す。

「んっ♡♡♡やっ♡♡♡そこ、じゃなくてえっ……♡♡♡」

「どこ？」

「……ク、クリ……♡♡♡」

「お前、あの時も一番感じてたもんな。ここだろ？」

クリッ♡♡♡

「ひゃあっ♡♡♡そ、そこお……っ♡♡♡」

クリトリスを、舌先で直接弾かれた。電流が背骨を駆け上がるみたいだった。

「い、一週間ぶり……♡♡♡」

「ずっと待ってたんだよなあ？　そう思うともっといじめたくなってきた」

「そ、そんな——あっ♡♡」

レロレロレロ♡♡クリクリクリクリ♡♡

「ひあっ♡♡あっ♡♡んっ♡♡した、上手すぎ……♡♡」

クリトリスを舌先でころころ転がされる。左右に、上下に、円を描くように。あの実験の時に見つけた弱点を、迷いなく攻めてくる。焦らしてたくせに、直接触り始めたら一切手加減しない。

（あの実験で全部覚えられてるんだ……♡♡私のおまんこの弱いところ、全部大和の頭に入ってる……♡♡）

チュウウ♡♡デュルル♡♡

「ひあっ♡♡す、吸わないで……っ♡♡」

クリトリスを唇で包み込まれて、きゅうつと吸い上げられた。あの実

験の時もこうされた瞬間に一気にイカされた。身体がそれを覚えていて、吸われたただけでお腹の奥がギュッと締まる。

「あの日もクリ吸ったら一瞬でいったら。このおまんこ、俺に吸われるのが好きなんだよなあ」

「す、好きとかじゃ——ふあっ♡♡」

「嘘つくなって。いま中がきゅってなった。バレバレ」

（バレてる……♡♡大和にクリ吸われるだけでおまんこが勝手に反応して……あのバイトのせいで身体が大和仕様になっちゃってる……♡♡）

同時に、指が入り口に触れた。

クチュツ♡♡

「ゆ、指も……っ！？♡♡」

「中も待ってたんだろ」

ズッ♡♡

「んあっ……♡♡」

指が一本、ゆっくり入ってきた。舌でクリを吸いながら、中に指を押し込まれる。二箇所同時の責め立てに頭がクラッとした。

「ひあっ♡♡あっ♡♡同時は……っ♡♡」

「あの実験でもこの組み合わせが一番反応よかっただろ」

グチュッ♡♡グチュグチュ♡♡

指が中の壁を探るように動く。奥の方を、迷いなく。あの日見つけた場所を、まっすぐ狙ってくる。

グリッ♡♡♡

「ひあっ♡♡♡そ、そこお……っ♡♡♡」

「一週間毎晩思い出してたからな。お前の中のどこが弱いか……もう頭に焼きついて離れねえし」

(毎晩……♡♡大和、一週間ずっと私のおまんこのこと考えてたの……?)

グリグリッ♡♡♡チュウウッ♡♡♡

「ひっ♡♡♡ふぁっ♡♡♡やぁっ♡♡♡イ、きそ……っ♡♡♡」

「まだダメ」

「む、むりい……っ♡♡♡大和が上手すぎて……っ♡♡♡」

「我慢しろ。高橋さんに触られてた分のお仕置き、まだ終わってないから」

「た、高橋先輩は関係な——んぁっ♡♡♡」

「関係ある。お前も笑ってただろ?——全部、ムカついた」

グリグリグリッ♡♡♡デュルルッ♡♡♡

「ぁっ♡♡♡やっ♡♡♡なか、ぐりぐり、されながらクリ吸われたらっ……♡♡♡」

「俺の舌と指でこんなに感じてるくせに……他の男に笑いかけんなよ」

「わ、笑いかけてただけで……っ♡♡♡」

「それが相手を殺したくなるくらいムカつくんだよ」

「大和……っ♡♡♡」

「——さっさとイけ」

グリグリグリグリッ♡♡♡♡レロレロレロレロレロレロッ♡♡♡♡♡
ジュルジュルジュルッ♡♡♡♡ヂュウウッ♡♡♡♡♡

「ひあああゝゝッッッ♡♡♡♡♡イグウゝゝッッッ♡♡♡♡♡」

ビクンビクンビクンッ♡♡♡♡♡

ビクビクビクビクッ♡♡♡♡♡

堪えてた分、大きくイってしまった。身体がビクビク痙攣して、大和の指をギュウギュウ締め付ける。

「っ……♡♡♡はあっ……♡♡♡はあっ……♡♡♡」

いった後で、どうしようもなく疼いているのに、大和はまだ顔を上げてくれなかった。

ジュルルッ♡♡♡

「んひっ♡♡♡な、舐めないでっ……♡♡♡今いったばかり……っ♡♡♡」

「いった後のおまんこが一番うまいんだよ。どんどんマン汁溢れてくるし」

「あっ♡♡♡そ、そこ今はだめっ……♡♡♡びんかんすぎて……っ♡♡♡」

「だから舐めてんだよ。もっといっぱい出せよ」

レロレロッ♡♡♡チュプッ♡♡♡

いった直後のクリトリスを、舌先でちろちろ舐め回される。さっきまでと桁が違う刺激が全身を貫く。敏感すぎて、舌が触れるたびに身体が

ビクンと跳ねる。

「やっ♡♡♡そこばかり……っ♡♡♡舐めないでえ……っ♡♡♡」

「だめって言いながらおまんこからマン汁ドバドバ吹き出してるけど」

「っ……♡♡♡」

（やばいやばいやばい……♡♡♡今日の大和なんかおかしい……♡♡♡）

身体をよじって大和の顔から離れようとしたけれど、逃すまいと太ももを掴まれた。力が強くて、振りほどけそうにない。せっかく出来た距離がグイッと引き戻される。

「逃げんな」

「で、でも……っ♡♡♡きもちよすぎて、このままじゃ……あたまおかしくなる……っ♡♡♡」

「おかしくなっている」

「よくない……っ♡♡♡大和のした、すごすぎてっ……♡♡♡何回も
イったらこわれちゃうよ……っ♡♡♡」

「壊れていい。むしろ、俺で壊れて」

「そ、そんなの……っ♡♡♡」

大和が仰向けに寝転がった。そのまま私の腰を掴んで、自分の顔の上に引っ張ってくる。

「ちよっ……っ♡♡♡な、なにこの体勢……っ♡♡♡」

大和の顔の上に、私が跨がる形。おまんこが、真下にいる大和の口に押し付けられてる。重力で逃げ場がない。あの実験の時と同じ——大和が下から舐め上げてくる体勢。

「あの日もこの体勢で潮吹いただろ」

「お、思い出させないで……っ♡♡♡」

「忘れられるわけないだろ。お前が俺の顔に潮ぶちまけた時のお前の顔、

すっげえ可愛かった」

「やだ……♡♡♡そんなの……っ♡♡♡」

「あの時お前、自分でもびっくりしてた。初めてだって言ってた。
——俺が初めてだったんだよな？ お前に潮吹かせたの」

「っ……♡♡♡」

「それが、どんだけ嬉しかったか。俺のことなんて友達以上に意識して
なかったお前が俺のテクで潮吹いたんだって」

（大和……♡♡♡そんなこと思ってたの……♡♡♡）

ズプッ♡♡♡ヌチュッ♡♡♡

「んあっ♡♡♡し、舌っ……入ってきた……♡♡♡中に……っ♡♡♡
」

この体勢だと深く届く。熱くてぬめった舌が、ナカの壁を舐め回す。

「やあっ♡♡♡お、おくまで……っ♡♡♡舌が……っ♡♡♡」

(大和の舌がおまんこの中にいる……♡♡中の壁、ぜんぶ舐め回されてる……♡♡)

グチュッ♡♡♡ヌチュヌチュッ♡♡♡

ヌチュ♡♡ヌチュ♡♡ヌチュ♡♡ヌチュ♡♡

「ひぎい♡♡そこばかりい♡♡♡」

弱いところを見つけられた。さつき指で押した場所を、舌で狙ってくる。

グリグリッ♡♡♡ジュルルッ♡♡♡

「ふあっ♡♡♡やっ♡♡♡今度は外！？そんな激しく吸わないでえ♡♡♡」

中と外を交互で責められているうちに、指がクリトリスに触れてくる。挟むように――

クリクリッ♡♡♡

「んあっ♡♡♡♡」

舌で中の弱いところを押しながら、指でクリを転がされる。二箇所同時に。

（指と舌で同時に……♡♡あの実験と同じ……あの日もこれで……♡♡）

グリグリグリッ♡♡♡クリクリクリッ♡♡♡

「ひっ♡♡♡ひっ♡♡♡ひっ♡♡♡やばっ♡♡♡また来るっ……♡♡♡」

お腹の奥から、さっきとは違う圧力がせり上がってくる。もっと深いところから、グワツと込み上げてくるような感覚。あの実験の時に一度だけ経験した、大和の顔面にぶちまけてしまった、あれが――

「やっ……♡♡♡なんか……っ♡♡♡出る……♡♡♡また出ちゃう……♡♡♡」